
遠くを見つめる

長月 夕子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遠くを見つめる

【Nコード】

N9860A

【作者名】

長月 夕子

【あらすじ】

じんわりと気付いていく恋もあるというもの。

バイトが終わると、いつも一緒に帰ることが普通になってた。バイト中に親しく話をした覚えはないし、住んでいる場所も違うのだが、いつだったか一緒に帰ろうと言われて以来、当たり前のようになっていた。

彼はとても派手なシャツを着て、吃驚するようなデザインのスーツにカバン、靴の配色もすごかった。毎日毎日色にあふれた性別不明なそれらのものを器用に着こなしてはいたが、無論ごく普通の山手線の中では、浮いていた。ということは嫌でも人目を引くということ、隣に座る山手線のような配色の私にも視線は注がれた。

「服はね、人に見られるために着るんだよ」

と、いつだったか彼は言った。衆目を浴びて、彼は確かに誇らしげだった。そんな彼を見ると、私は高校時代のスカートの極端に短い友人を思い出す。

「超むかつくよねえ」と口を尖らせるしぐさも、一人で家路に向かう私の背中に「ちよつとまってよ！一緒に帰るんでしょ」

と追いかけてくる様子、道行く人を見る目つきも、髪をかきあげるしぐさもよく似ていた。丹念に塗りつけたマスカラの扇のような友人のまつげに、彼の天然のまつげも負けてはいなかった。

電車で揺られながら、私と彼はよく服の話をした。といってもそれは彼の独壇場で、なんだかタバサだとかオゾンなにやらヒステリックがどうしたと舌をかみそうな流暢なカタカナがあふれ出す。そこへもってきて渋谷だの代官山だの青山だの六本木だのと私とは縁のない地名の羅列に、女友達のような気楽さの中で、私はほとんど夢心地でその話を聞いていた。

1月のプラットホームで、彼はロシア人がかぶるようなモコモコ

の帽子をかぶり、インディアンのようなコートに身をすくめていた。

「2月に実家へ帰らなくっちゃ」

「2月？法事か何か？」

「俺年男だからさ、やぐらに登って餅まかなくちゃいけないんだよね」

「年男？餅？実家ってどこ？」

「……愛知」

ため息に乗せて彼は横顔で呟く。

ホームに冷たい風が入ってきて、細い首をもっとすくめた。

「お土産、よろしく」

「いろいろ買ってきてあげる」

「それ、名古屋じゃん」

「名古屋は愛知だよ」

彼がポンポンと私の頭を軽くたたく。その手は大きく、骨ばっている、男の人の手だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9860a/>

遠くを見つめる

2011年1月16日00時51分発行